



ダイズ新品種「そらみのり」の育成

暖地水田輪作研究領域

大木 信彦（おおき のぶひこ）

研究の背景

この10年、ダイズの収量が都府県において減少傾向にあり、特に九州では深刻な低収となっています。東海～九州に至る西日本では40年以上に渡り「フクユタカ」が主力品種として栽培されていますが、国産ダイズの安定生産、安定供給を図るためには、より多収の新品種が求められています。

米国の品種を用いた新品種の育成

世界のダイズ主要生産国の1つである米国の品種は、日本の品種よりはるかに多収ですが、主に搾油用であるため、日本国内の主要用途である豆腐の加工に影響するタンパク質含有率が低く、納豆、煮豆用としての子実の外観も劣ります。また、栽培地の気象条件も日本と異なります。そこで、米国の品種を交配親に用いて、日本での栽培、加工用途に適した多収新品種の育成を目指しました。

新品種「そらみのり」について

2013年に九沖研の育成系統「九州148号」と、米国の多収品種「Santee」を交配し、その後代から新品種「そらみのり」を2023年に品種登録出願しました。「そらみのり」は「フクユタカ」よりも1週間程度成熟が遅く、莢数が多い（図1）ため、多収となります。植物体は大きいものの、倒伏の程度は「フクユタカ」と同等かやや少なく、莢が弾けにくい特性も有しており収量ロスを低減できます。各地のコンバイン収穫試験で、「そらみのり」は「フクユタカ」より収量が6%～56%高くなりました（表）。



▲ 図1 「そらみのり」の草本
左：「フクユタカ」 右：「そらみのり」

豆腐と納豆の加工適性についても、メーカーによる評価が良好で、特に、子実のへその色が「フクユタカ」は“淡褐”ですが、「そらみのり」は“黄”であり、納豆に加工した際の外観が良いことが評価されています（図2）。



◀ 図2 「そらみのり」の子実

左：「フクユタカ」

右：「そらみのり」

カラスケールの大きさは1cm × 1cm

「そらみのり」の普及への期待

「そらみのり」という品種名は、ダイズの生長をはぐくむ“空”に感謝し、多くの子実が“実る”姿をイメージして命名しました。令和5年から生産者圃場での作付けが既に開始され、「フクユタカ」よりもあきらかに多収であると評価されており、豆腐、納豆に加工される予定です。今後、作付けが拡大し、西日本地域のダイズ収量の向上に貢献することが期待されます。



▲ 「そらみのり」の
プレスリリース
記事はこちら

▼ 表「そらみのり」の現地実証試験成績

試験条件	品種名	成熟期 (月/日)	倒伏 ²⁾	収量 (kg/10a)	標準 対比 ³⁾
三重県 菰野町	2021 そらみのり	-	少	253	106
	フクユタカ	-	少	240	100
兵庫県 たつの市	2021 そらみのり	11/05	微	201	131
	フクユタカ ⁴⁾	11/15	微	154	100
	2022 そらみのり	11/22	多	298	156
	フクユタカ	11/15	甚	191	100
熊本県 山鹿市	2022 そらみのり	11/14	中	330	151
	フクユタカ	11/07	多	218	100
熊本県 ¹⁾ 大津町	2022 そらみのり	11/10	中	226	153
	フクユタカ	11/01	中	148	100

1) 台風の被害により、低収傾向となった。

2) 倒伏は無、微、少、中、多、甚の6段階にて評価した。

3) 収量の標準対比のうち、赤字で示したものは標準対比130以上であった。

4) 生育異常（青立）により、成熟が極端に遅れた。